

ただ事ではない「南相馬市」の放射能汚染！

～あちこちに点在する‘黒い粉’の正体は高濃度放射性物質～

南相馬市のあちこちで‘黒い粉’がたまっている箇所が見つかった。市民団体が測定したところ、とてつもなく高い放射線が検出された。γ線(電磁波)だけでなく、α線やβ線とよばれる高エネルギー粒子の放射線も測定されている。セシウム以外の放射性物質が含まれている可能性が高く、市民団体も核種の検査を要望している。

3号機の爆発で、まるで火山噴火のように灰色の物質が上空に噴出した映像を覚えている人も多いと思う。あの後、原発周辺でプルトニウムが検出された。この‘黒い粉’が3号機爆発と関係したものだとなると、事態は大変深刻なことになる。ただちに脱出しなければ取り返しのつかないことになるような気がしてならない。

～ まずはニュースより ～

南相馬で「高放射線検出」と市民が申し入れ

2012年02月21日

南相馬市の市民団体「フクシマの命と未来を放射能から守る会」(小武海三郎代表世話人)は20日、市内に「高い放射線量の物質が散らばっている」として、早期の徹底調査と結果の公表を桜井勝延市長に求めた。守る会によると、昨年12月、同市内のコンクリート駐車場から土壌100グラムを採取、神戸大に分析を依頼した。その結果、

1キロ当たり換算で、100万ベクレルを超える放射性セシウムを検出

したという。また、

土壌は「α線、β線も高い」として、核種検査も求めた。

指摘を受けた市は、同じ場所で採取した土壌を測定し、1キロ換算で**1万8000ベクレルの放射性セシウムを確認**した。地上1センチの放射線量は1時間当たり8.7マイクロシーベルト、1メートルでは同1.29マイクロシーベルトだった。採取場所は雨水排水溝近くだった。市は「薄く堆積(たいせき)しているので、空間線量に大きな影響を与えることはない」と考える。堆積物に触れないことが重要だ」としている。



福島南相馬市の駐車場で採取された土壌の上で、毎時2.47マイクロシーベルトを示す線量計＝20日午前、南相馬市

市民団体の分析データを見ると、α線の数値が異常に高い。3号機爆発で吹き飛んだ核燃料の粉塵が集まったのではないかと懸念がどうしても頭から離れない。

もし、核燃料の粉塵を含む物質だとしたら、ヒロシマ・ナガサキ・第五福竜丸の人々が被ばくし、病気の原因となった「放射能の灰」と同じだ。絶対に吸い込んでほしくない極めて危険な物質ということになる。

密度の重い物質は、空気や水の作用を受けて次第に一箇所に集まる性質がある。川で砂金を集めることを想像するとわかりやすいと思う。

プルトニウムやウランは極めて密度が高く重い物質だ。粉塵として環境中にばら撒かれた後、風や水の作用で次第に特定の箇所に集まることは容易に想像できる。今回、道路脇などで見つかった‘黒い粉’はこうした物質が集まった可能性があるのではないかと。藍藻による濃縮作用の可能性も報告されているが、いずれにしても春風で舞い上がる可能性が高く、極めて危険な状況だ。

南相馬市では自治体の職員や医療関係者の脱出が相次いでいるが、学校は通常通り行われている。マスクで身を守っている子どもたちは半数もいない状態になっているようだ。

子どもは好奇心が高い分、我慢する状態を長期間にわたって持続することは無理だ。

一刻も早く脱出すべき状態にあると思う。しかし、国や自治体は動かない……………。

【黒い粉の線量分析結果】

総線量: γ線+β線+α線=61.321 μSv/h
内訳: γ線+β線=15.622 μSv/h
α線=45.699 μSv/h



「絆」「復興」の掛け声がむなしく響く記事が掲載された。高濃度の放射能に汚染された地域で、自治体職員や医療従事者の流出が止まらないのだ。

新聞では「復興の遅れ」を懸念する論調で書かれているが、果たしてそうであろうか？

なぜ人々が次々と脱出したり、赴任に消極的にならざるを得ないのか、その理由をきちんと捉えた上で、どうあるべきかまで書かなければ事態はますます混乱し、脱出は後を断たないだろう。不安材料の事実だけを伝えても、現地で暮らす人たちの救いにはならないし、何の希望も見えてこない。

見通しなど全く見えない放射能とのたたかいを強いるだけではもう限界が来ているのだ。「除染」という名目で、放射性物質をあちこちに移動させているだけでは根本的な解決にならないばかりか、内部被曝を蓄積させ続けることになる。自治体機能や医療体制が崩壊するような場所で、どうやって安心して子どもを育てるというのだろうか？

これが「先進国」と呼ばれる日本の現状なのかと思うと、背筋が寒くなる。真面目に働いてせつせと税金を納めても、命の補償すら危ぶまれる国だとしたら、誰が政治を信頼するだろう。

間もなく東日本大震災から1年を迎える。事態は何か良い方向に向かったのだろうか？この1年をふりかえると、国の存在というものをこれほどまでに疑問に感じたことはなかった気がする。同時に、科学者・マスコミなど権威や情報の発信源として、物事の判断の基準であるかのごとく振舞っていたものたちが、実は虚構の構図の上に成り立つ、エゴイズムに汚れた存在であることを思い知らされた1年であったように思う。

福島民報の社説に次のような一文があった。

…いずれどうせまた世界のどこかで起こるであろう放射能被害に備えて、健康被害の有無を含めた情報を蓄積しておくことは、人類への貢献なのだ。それはとりもなおさず日本のあるいは日本人の、人類に対する医療的な社会倫理的な責任で、つまり医療制度全体のまさに根幹だ。…。

放射能との共存時代に備えて、福島県民が率先して健康被害の実験台になり、全人類のために貢献しろと公言して憚らない新聞が存在していることに驚きを禁じえない。地域住民が被曝し続ける状態を放置する国を追求するのがマスコミの姿勢ではないのか？

あまりにあり得ないことに、悪い夢でもみているような気さえしてくる。戦前の日本にタイムスリップしたようだ。この国が破局に向かっていよううすら寒い気分がひたひたと押し寄せる2月である……………。

2012. 2. 22

福島沿岸 止まらぬ人材流出

原発周辺常勤医が半減

福島県で東日本大震災前から問題となっていた医師流出に歯止めがかからない。138病院の常勤医は昨年12月1日時点で1942人と、原発事故直前から71人減少。放射線への不安から首都圏などの大学も医師派遣に二の足を踏んでおり、医療機能の停滞が復興の遅れにつながる恐れも。危機感を強める地元では優遇策の検討も始まった。

放射線不安 大学、派遣に二の足

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故の被害を受けた福島県南相馬市で、震災以降の市職員退職者数が3月末で1500人を超える見込みであることが21日、分かった。震災や事故対応による心労なども影響していると考えられる。桜井勝延市長が同日、東京都内で開かれた内外情勢調査会の講演で明らかにし、市の現状を「自治体のメルトダウン(炉心溶融)」と表現した。

南相馬市 職員150人退職へ

月1日時点)に対し定年も含め1200人が退職する見通し。さらに数人の早期退職が見込まれる。退職者は、看護師など医療職が多く、遠方に避難した家族の介護や子どもの進学などを理由に挙げたケースが目立つといわれる。この認識を示し、「この市長「自治体のメルトダウン」講演で、桜井市長はまず、昨年3月11日の震災と原発事故の発生から自治体間がメルトダウンしてはくの間、国からの指示が伝わらず、原発事故も誤報が伝えられるなど混乱した状況が続いたと説明。その上で「国から連絡がない、県は指示を講議で、桜井市長はまず、昨年3月11日の震災と原発事故の発生から自治体間がメルトダウンしてはくの間、国からの指示が伝わらず、原発事故も誤報が伝えられるなど混乱した状況が続いたと説明。その上で「国から連絡がない、県は指示を

出さない。われわれの判断だけでやらなければならなかった」と振り返った。震災後の市職員の退職については、「家族を津波で」流されても頑張ってきた職員たちが、耐えきれなく離脱している」との認識を示し、「この